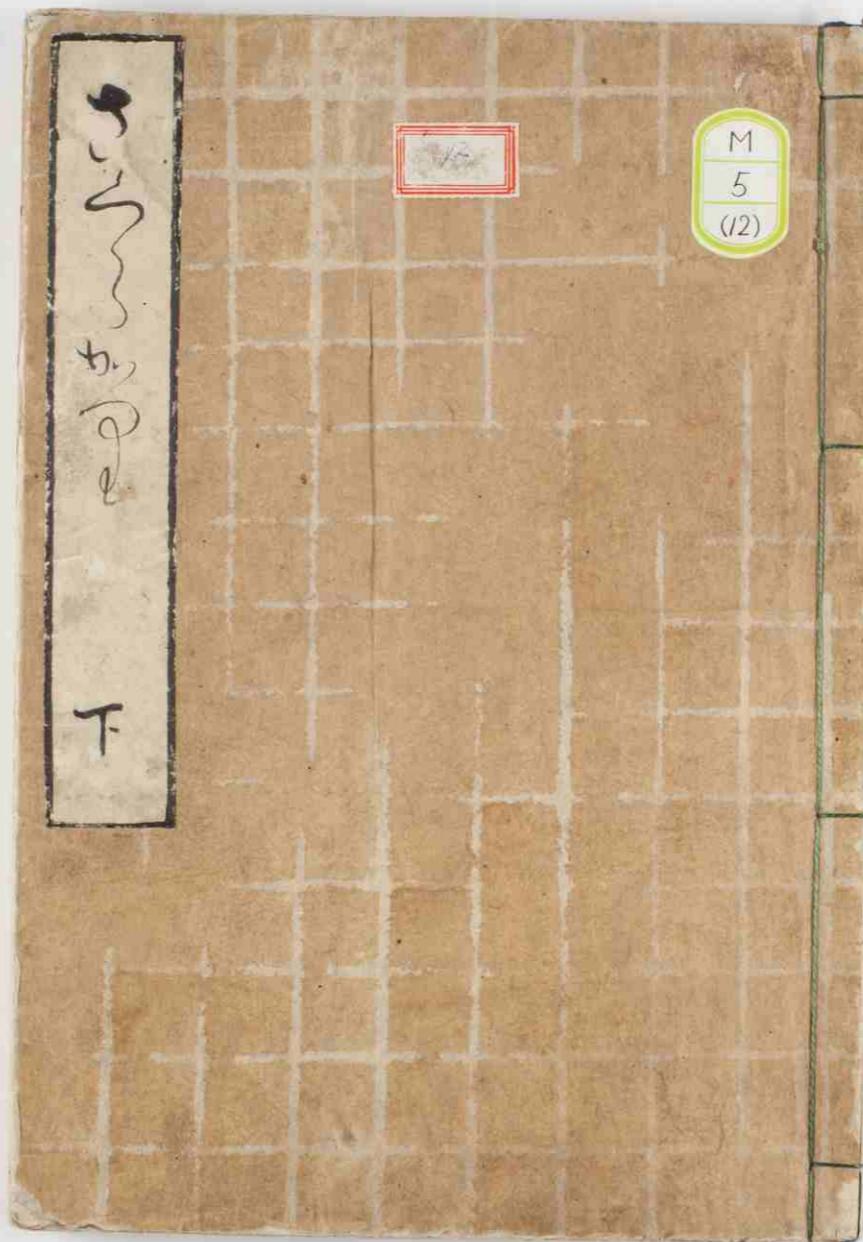


破損あり

以下 汚れあり





櫻賀理下巻 母久呂玖	
玄嶋櫻	一丁才
花園さく	一丁才
雪舟の山櫻	一丁才
金一毛櫻	二丁才
大堤さく	二丁才
雨零櫻	四丁才
捨神さく	五丁才
乱橋さく	六丁才
琵琶沼櫻	七丁才
三哲山さく	八丁才
姫法山の絆櫻	九丁才
笛竹さく	十五丁才
檢断さく	十丁才
駒形さく	十一丁才
櫻田さく	十二丁才
小和清水櫻	十二丁才
由伎の宮櫻	十三丁才
山吹さく	九丁才
吹上ヶ櫻	十三丁才
龍神さく	十三丁才
笛吹櫻	十四丁才

篠瀧さう
 十五丁才
 日揚寺の櫻
 十九丁才
 連理れさう
 二十一
 沢前^{シメル}の楊
 二十七
 平曳のさう
 二十七
 小田原ざう
 二十七
 ちうの桜
 二十九
 さそきさう
 二十九
 小神さう
 二十九
 うゑみさう
 二十九
 サツ九日さう
 二十九

三笠の山さう
 せ一丁才
 あくらさう
 せ一丁才
 登基皇さう
 せ二丁才
 こうくの河櫻
 せ二丁才
 輪田寺さう
 せ三丁才
 たのう地園櫻
 せ四丁才
 ら道のさう
 せ四丁才
 長圓の一重櫻
 せ四丁才
 余夏の八重櫻
 せ五丁才
 いうさう
 せ六丁才

佐久良賀理 下巻

菅江真澄誌

松嶋櫻

東嶋の瑞巖寺の山瀧さう、波あれ演の近^シ小五奉
 庵とよまつり、妙寺小瑪瑙^{モウナフ}にて住^スる。十六尊^{ロクジ}
 漢其軀^{イシギ}五斗才キモト、高^{タカ}う人の身をあわせても、あさう了
 な^シくも見え^シむと、安置^スす。地あり小老本^{シロハラ}ひよりおら
 く嘆^ヒうと、心^シこして桜園^{シヤクエン}にて、桜園^{シヤクエン}強^クが罪^{ミテ}さ^シも
 告^シうて、御^{ミテ}うかうかとあゆ^ムと、すこもくもくと、北東
 前^{シメ}用^{ヨウ}のねぬ^{シメ}雪^{シメ}の吉^{ヨシ}峰^{カミ}と、日記^{シヨウキ}にしと、花^カの松^{マツ}
 と、日記^{シヨウキ}を、花^カの松^{マツ}の事^{シメ}、其^{シメ}日記^{シヨウキ}を、せめり、

花園^カ櫻

信濃國守在^{シテ}候^ス、誠^シ方^カ大^シ勝^ス、内^シ賀^ス、祭^ス、

あれと今丹那年宮の御、椎原景富大人は、と不、鵠洲と
小舟、さう渡れ、花はまだ咲つて、不二毛が、とおもひて、とく
おもひつけりは、すばる海ノ底を、その色あはせや
うしのそよぎる花は、まだ雪、まだにつきて、おりぬ、おもひて、
あ盛りゆゑもあり、この名をうとづかふと、よきの浦の
花里とづゝと美て、めぐら、名をうつべ、ひとごとく、固
の、よきよきと花よきものと、路、北事、諷説の湖とよ一
卷の日記小生、あく小驚く。

雪船の山櫻

綴子驛の後、雪舟、とぞく、此で、也、と、齊明天紀、内、金龍
ゆき、おおき、ほどの事、かうど、七、倉、宮の、縁が、かと、見えず、すこ此
處の、枝郷、小、知子、内、と、治、脅、延、久、さ、所、蝦夷人、極、家、し、又

近、年、世、す、も、家、四、五、も、あり、也、と、よ、と、今、も、佐、三、内、也。
今、も、富、字、小、知、子、内、ゆ、ゆ、と、知、許、余、伊、と、蝦夷、詔、御、
本、紀、小、ゆ、糰、養、と、が、ゆ、と、糰、伊、と、那、舞、光、澤、の、事、と
あ、う、と、玉、を、キ、コ、十、キ、り、う、と、も、キ、コ、十、イ、と、と、今、も、李、重
同、名、あ、と、其、山、崎、え、と、キ、コ、ナ、イ、越、え、と、西、破、う、東、破、へ、と
山、路、向、り、地、綴、子、ゆ、も、糰、養、の、住、す、し、舊、跡、ち、ぢ、や、北、館、南
館、内、館、外、館、か、ど、名、あ、と、ま、の、文、殊、山、の、雪、大、鷹、形、車、れ、と、
消、と、と、と、と、糰、因、佃、と、と、て、不、二、ラ、布、雪、地、田、春、田、の、屋
か、と、其、雪、船、山、の、禁、原、は、う、小、移、多、と、近、多、と、名、ゆ、く、
牡丹、楓、す、あれ、れ、此、山、名、ゆ、く、と、雪、船、の、山、櫻、と、ぞ、

八、董、一、重、櫻。

此櫻、秋田、久保田、城、内、坊、の、亀、町、と、御、の、姫、庫、の、近、多、と、望、む、う

さうめり

世主桐筒谷キリカヤシ小も車か吸し筆下アヒタ重アヒタ文アヒタあれど此ハシうえづの
八年エイジ一重イチヂウの春ハルを一重イチヂウの花ハナ咲アキラケルと之オノの裏アヒタ
手觸ハタフはぬ橋ハシ一本イチボンをカウシテうるお花ハナのことをひ筆アヒタ一ト車カ世
やハシ不珍ハタツしきに無アモリすとわき橋ハシこカウシテはくとすのよヨ、
かカくすとある事アリせり書シし、花ハナの走ハタマツめとト日記ヒガリかカの書シ
過ハシマツりう山サンの桜サクラが盛アツムりと考クダルて廿ハシナ十日ヒガタ斗トト寄宿キヤクシヤクを、山サン某モジ喜ハス
窓カウて、萬ミリの走ハタマツとよアモリ出ハシマツて五十日ヒガタ橋ハシり旭川アサヒカワと渡ハシマツれ、橋ハシ左カミ
河カワ岸カタ桺シラカシの木キさくと立タマツ中ハシナの今ハシナの三ミ年ハシナのひヒとぞ
中ハシナははハハとよアモリむじをうあアモリをカウシテあらく連ハシマツ、庫カニ解ハシマツれ、
ち名ハシマツを有アリはアモリ。 作ハシマツ義降ヒヨウなど、考クダル給ハシマツ嚴アシハシ取ハシマツ、
河カワ岸カタ小コロ鷹タカ狩ハシマツと、よなアモリもよアモリとカウシテやつれ繪ハシマツ、
君カミとカウシテ道ハシマツかカくほハシマツの石イシやアモリひヒかカづハシマツ。 来ハシマツ眉カニ顎カニ也ハシマツ

年ハシナと電ハシマツ返ハシマツと老ハシマツ翁カニあアモリじ前ハシマツとあアモリやアモリ翁カニがアモリとおアモリ
うアモリをあアモリ、大アモリしアモリち出ハシマツてアモリことあるアモリ人ハシマツもあアモリてお
アモリあアモリ、殿ハシマツよアモリえアモリりあアモリ、大アモリも出ハシマツてアモリれアモリせアモリ、
あアモリ小アモリ出ハシマツれアモリ、五ハシナセ除ハシマツるアモリ米ハシマツ久保田カニ人ハシマツとアモリてそアモリあ
廻ハシマツとアモリ出ハシマツ来ハシマツ年ハシナとアモリ、引ハシマツ返ハシマツとアモリとアモリもあアモリとアモリ
事ハシマツとアモリとアモリ、ひアモリとアモリとアモリ、云ハシマツのあアモリひアモリかカ繪ハシマツを書シ
米ハシマツとアモリ、あアモリとアモリ、あアモリとアモリ、あアモリとアモリ、集ハシマツで
才ハシマツも才ハシマツとアモリ、一アモリ程アモリ携ハシマツりアモリとアモリをアモリ、御ハシマツ貞カニとアモリ才ハシマツも才ハシマツ
けアモリとアモリ役ハシマツのアモリとアモリかカ絵ハシマツをアモリいアモリじアモリ、也アモリ藏ハシマツ一アモリ外アモリ書シ
小アモリきアモリかカれアモリ、とアモリ引ハシマツ返ハシマツとアモリとアモリはアモリ作ハシマツれアモリ年ハシナ引ハシマツ
そアモリ年ハシナもアモリとアモリ、引ハシマツ返ハシマツとアモリとアモリはアモリ作ハシマツれアモリ年ハシナ引ハシマツ
そアモリ年ハシナもアモリとアモリ、引ハシマツ返ハシマツとアモリとアモリはアモリ作ハシマツれアモリ年ハシナ引ハシマツ

もうどうぞ當小のせとれどもんれや、中止を本音
と、云ふ事あひ、其君五つともおどりて、身の紙す
か一束を補ひ切るて諭すを以て、鷹を知り、身もきとにして
たまう人あまに解れ来て、まわひて、御前を、於まえ
近づくまでもだらうのそれ、翁はうらむをうき、魂身を
主官もあらもうるをうめ、まうび手と捨て叶へぬをうめ、
牛と毛と、翁はうらむをうれと、時を経ひぬる、あら
来湯所をかゝて、庫かくまのれまきと、あらむをひきとて、そ
ぞうかまに、翁はうらむを、折敷を一疋で、廢す。君のゆゑにまうす
やうのとよのと折敷を一疋で、廢す。君のゆゑにまうす
なれば、云はれどもうだ、紙すを包むるも、ゆうて、うまた
あまして、せよのと、うそのと見立て、がまう。むし、誠も伊集。

今祐もうじまくよき、もあまうもまくよき、其の上へすれ
よひて、其の下へまくよき。君はうらむを、うめを多き、來
とどくわざ給ひあひとあひと、君はうらむを、うめを多き、
もと、也と、まくよきとみだりやうく、まくよきをめうて、
君はれ、今もう廻ふて、來機を試みかねど、ゆく年は未熟
つけをもせのこまひと、ゆくもとを力見て、くもの肉をうけと
ほひ、一間と、上段造りあつて、みとを、君のゆゑに、
まうすりまくよき。翁が、敵に、貢奉を、試みよと、定を、藏
中樹、儀ひ添て、與じと、すよと、物のと、砂の、山腰、腰、
縫ひ、石の、鬼輪山の、舊傳の川の、源、東と、西と、山腰懸石
をもあらゆる。つこもひ、保てるよと、がちと、月の、裏と
むれゆる、あらむと、えむ。

四
三九二

今ともしめ名を残す。世君古 櫻藝サクラノホシキと好也給ひく
まろもあて櫻サクラの木末カミも残りて此向に名残ナガマの木を
大神宮の三本の大櫻サクランボの内鶴川村、多惣草門の庭の梅い
まうほどの重一重櫻サクランボも由ソレ自ソラに急絞ハリ櫻サクラの躉ヒヨウを
其ヒ櫻サクラ今イマ枯カルくとて死事シス。

大坡オオツバのさくら

由理郡本庄の滝タケより南へ一里ばかり大堤オオダムにて岩原
墓ツブリとありす。中塘の山崎山小華師佛コハシヤマコハシ等ドウ世山の場マツ
モトシマツの御ミタマツとす。久保田の寳貝鏡タケニミツカミ後アフタの御ミタマツ
の御ミタマツは此名コトナをもあらず。大塘オオダムよりさくらの御ミタマツ
四月のあつとう。城大櫻サクランボのやうて名をもばとこうくさく
をとくかく雪シロと暮カクくすとあきひづれ。

雨アメ零ゼリ櫻サクラ

地ジ櫻サクラを秋田郡南比内アシナ十二所の御ヤマ谷ヤマ地ジ所シテと士サムライの河井正紀サモヨシキと
ぬの家の望アシタカふ座シテ當塚タカツカあり。其櫻サクラ樹ツリーと有アリ極ハシマリとも。庄頭ヤウトウ櫻サクラ
モトシマツも甚シカニ無ナシ。慶長キョウロウ未ミわら。花都ハナミツを窮シテお
盲メシヒ人の琵琶ヘビを唄カタひ來カムて。もとしうげれ。十日トガ到ル此コ郡クニ
止マケて。今イマナシ。者ヒト人ヒト集シテ法師ハサシが好ハシマリ。何ナニかシ。法師ハサシ
が酒サケをシテ花都ハナミツをシテ呑スル。吾ガ好きハシマリ。餘ハタチをシテ食シテ飽シタをシテ食シテ
ある事ハシマリ。とシテは爲シタカニ事ハシマリ。とシテひそり餉シテ食シテ足シタカニしシタカニとシテ。
少シテも御ハシマリされ。一斗ヒヂの餉シテ食シテ足シタカニしシタカニとシテ。少シテも御ハシマリされ。一斗ヒヂの餉シテ食シテ足シタカニしシタカニとシテ。
少シテも御ハシマリされ。一斗ヒヂの餉シテ食シテ足シタカニしシタカニとシテ。少シテも御ハシマリされ。一斗ヒヂの餉シテ食シテ足シタカニしシタカニとシテ。

鶴屋喜讃善哉御小豆店をとよひ了事でひだり水付
 あびきよしもん、今、一斗の餼こまとめふ事、すまのう
 とく、花都のそよぎひえど、卅も都の首もん、お駕
 かとよさうむらひくもとくせん侍と、進みて、卅もく
 うちきり水付付て、御みと、なはじやすに、ひまみと、一件引
 のものもかじゆけし御と、上はやうみと、うかいふはくの
 とく、今まよ、一月ぞうすもせうた、手一ノコヤと似を、一月も
 飯を飽きしうと、第、花都約束の如わが首をきまし
 せきとくと、今まうらわひと、同の首をあきらかに、お駕
 やすいわく、花都座當の首ええまきわの士み、まちう
 用ふとし、うぬけ武士といわまのとつやうも、かく無む
 事と、さく首をうどひよき、氣をやさ若士のうりゆ。

まゆの里をぬきうちひえとしえうげりあすとねす、せよ懸吹
 と今まうら寄り君も、首の切口う、餼のもくと吹出あり
 まともうるえあがみめと、あそそを、其から來、後、一月せ
 ても、さと女のあまさつて、淮ざらく、いんぐに解く、うと今
 朝、あれづりも法師を教え經よみて、ゆきがくを保ふるを
 花都と名をひき、湯の上より、橋と、うそさん、善知玉のむ
 まゆれい、とをぬき、花都世が御と、ぬよとく、卅ほどの
 て、西す、うとく、近きころ、其を桔ねれど、座當橋とひ、
 そく、草あで、いとく、御と、建くと、都が雲並と、齊り、西ヨリ
 中宿えり、祠の下の木のくどうりげと、あねのうて、大木あふ
 をむれど、神あじと、雲祠太翁と、うちうぢら、やう捨く、う

建て、父弟改其廟宇、移之寶貝磨の末、明和は、めやを古事
ありしき村う花都う無益、癸卯十二月十日未てふありとよ。

捨神櫻

北櫻と同郡別所村の櫻き小在り、別所ハ同名三河國カとありて
万歳の出立在處也。書家主と別所開あリ、秋田の別所も
みちの九戸の為人主とぞ。中少、自留山五郎無衛と云う。白雲
重志の二男、末龍也。正月式と申し、若水むも。玉希
の大紋小木太刀と云う。本主ニ三家ある。とすら、
とすら、白雲山治右門が祖與五右門と云々北与五右門をとて本家
を有す。今も治右門門を本家として、今一歳を絶す。北村堂領
大日如来廟行基僧正作之本木、大日如來、南部鹿角郡宣
盡。遮那佛坐木、赤木、千狹大日佛と云ひ伊勢南部の吉良澤の大日

如来堂の別當田明光院源起小養良光二年開基地大日如來行基寺
御作、同祿して佛像も空、空り給ひ長牛村の大日を遣ひ、後
此小豆泥の大日如來、長牛寺大日如來、同作もとれど此
別所の大日の事のせも、又千狹の大日如來と小豆泥の脊梁、みづ
みづとほ、馬と似てあり、と云ふ。又別裏近き山の
宝殿、捨神子祖翁也、南部の淨法寺の蘭華音寺也。すら
出捨ひ、南部淨法寺の小豆泥也、ひし十三面平の丁女田、
そせやうち、おもに馬の玉井連小馬事、ひこもく事のゆうとせ、ひれを
秋田の別所と云ひ、もと住むびあると云ふ。そく不油りけと云ふ
夜は木のうはりまどもとて、其後改事もとくもとて、もとて、不油
我を觀音へかづむかとをして、もとせやうち、ひりつは、桜かのう
又始離津と云ひ、地あらむて、觀音へまわし時、ひあいをさす

まじめもすゞ捨神と觀音の遺跡のまでも、ゆゑすありけられ
地をせざるまくろ子橋あれへをそゆまとことのせら

乱橋櫻

地三れ橋と云ふとよこ在り。御年日記の中、高人畠村すみ
えをよしし鎌倉へ往復の道をとすてぬ着も商人と出でて夜の
それと、まともうかこしておとこぼひの云てのをすやうと、陸奥水戸
不見朝^{アサヒ}今^{イマ}勝林村^{カツリムラ}の郷の物語もあらず。此處入船^{ハヤシ}近く鎌倉街道に
至り、よし乱橋と云ふあらず。相模國鎌倉海道をと乱橋と云
ふあらず。沙石集^{アゲハシ}尾張國山田郡^{サンタ}右馬允明長と云ふ俗あり
り、承^{シテ}冬のまを京^キを出で、や瀬川^{セガタ}の幾^{ハチ}の舟^{ボウ}をまわして、
武士も血^{スベ}とあらぬなりとあるびとを、金輪^{キンル}夏^ハ、具^ツ一まつて義時
見^ミ矣^ス。まくらく首^{スル}てぬでしと、湯井の濱^{ハマ}つづき又例の僧^{ソウ}出来事

み跡^{ミヅケ}を、蓋^{カバ}す沼^{カニ}をとびこすと、今^シ最最後^{シラフ}と一心^{シヨウ}念佛^{ブダ}一けん。
そぞ亂橋と云橋の名やかて、年來^{シテ}智音^{チオン}に行會^{スル}てうどを多^シを、
乱橋と云ふ橋で、とまく、五^ごさうの云ふ字もあり、すと、其の名をも
あも秋^{シキ}宿^{スル}者^{シテ}小^{ハシ}をれ橋^{ハシ}、花^{ハナ}芭^{ハナ}草^{ハナ}生^{スル}地^ジのあらのをれ橋^{ハシ}を
名えり、秋田郡^{カタ}神^{カミ}足^{アシ}橋^{ハシ}と乱橋あり。むし、仙北郡^{セン}大^シ杉^イ山^{サン}大^シ村^{ムラ}
も、乱橋と云う、いと多く名^{スル}よし。地^ジ神^{カミ}足^{アシ}橋^{ハシ}小^{ハシ}をす
猶^シあり、岩城殿^{イワシマ}の墓^{ハシ}櫻^{ハシ}と云ふ是^{ハシ}すうとあき男^{ハシ}えの病^{ハシ}一^{ハシ}
事^{ハシ}と今^シを充^シめ^{スル}極^{ハシ}て、とくに我^{ハシ}と云ふが、云^{ハシ}れは、不^{ハシ}極^{ハシ}下^{ハシ}よ
望^{ハシ}を給^{ハシ}れと身^{ハシ}あられ、人^{ハシ}みあられ^{ハシ}て、身^{ハシ}の^{ハシ}と^{ハシ}さ^{ハシ}の
生^{ハシ}の^{ハシ}と^{ハシ}小^{ハシ}を^{ハシ}て^{ハシ}と^{ハシ}掘^{ハシ}あられ^{ハシ}ば、伏^{ハシ}七^{ハシ}二^{ハシ}九^{ハシ}十^{ハシ}を^{ハシ}掘^{ハシ}起^{ハシ}
易^{ハシ}く^{ハシ}か^{ハシ}が^{ハシ}れん、文^{ハシ}字^{ハシ}も^{ハシ}多く^{ハシ}り^{ハシ}う、ま^{ハシ}岩城殿^{イワシマ}の墓^{ハシ}、敷^{ハシ}石^{ハシ}も^{ハシ}う、此^{ハシ}墓^{ハシ}高橋傳藏^{カツラ}屋敷^{ヤシキ}小^{ハシ}在^{ハシ}じが^{ハシ}世^{ハシ}中^{ハシ}ま^{ハシ}今^シ福^{ハシ}

高橋氏の祖家太郎兵衛^{シテ}、岩城の築城の後、城主世を定め
其高橋傳藏^{シカク}ととある。世家を逝去致す。

狂比琵琶沼櫻

御御^{シテ}神足在中野村、出わすて、分戸嶋と又明里^{ミナミ}社祭日、六月
十五日七月十七日、三足^{ミタツ}踊あり、別當、大龍寺^{カイジ}開山^{カイサン}行基大
僧正中興^{シヂキ}、祖^{シテ}爲覺圓仁大師^{スケンジン}天台^{テンテイ}寺^ジ、世^セ、羽里山^{ウリ}行
王^{ウニ}寺^ジ、^{シテ}絶^{スル}し、信濃國^{シモン}川中嶋^{カミナシ}の軍^{アーミー}、中河
秀慶^{ヒデヨシ}、此士^{シテ}出家^{スケチ}して秀慶法印^{ヒデヨシ}、慶長元和^{ヒデヨシ}、
修驗者^{ヒョウエンザイ}始^{ハシ}くもゆみ、秀慶、寛永八年三月二十日寂^{スル}、九世^ク、
十世^ト永全法印^{ヒロツネ}、明和四年^{ヒロツネ}、天龍寺^{テンリュウ}、往復^{ヒヤフ}の街道^{カミナシ}のゆき、
琵琶沼^{ヒバモ}もむろ大沼^{ヒバモ}のありす、狂比琵琶法師^{カイヒヒバ}琵琶流^{ヒバ}
まこと琵琶の形^{ヒバ}狂比琵琶小僧^{ヒバ}らしきをもとより人稱^{スル}ありと云ひ有る。

三哲^{サンセイ}山さくら

三徹^{サンセイ}山、秋田郡南^{ミナミ}内^{シテ}在十二所郷^{トトロコ}の折橋^{ハサカ}の近^シ在て、つまみつて、
此人^{シテ}大龍^{ヒラタ}温泉^{ヒラタ}を、今^{シテ}やれどもとおひ法號^{ヒハ}と大舉^{ヒヨウ}了心^リ居士^{シテ}寛文
壬子^{ヒニ}六月十七日死^{スル}、行基^{ヒキ}本名^{シテ}千葉上總介藤原^{ヒラタヒタツヤヒラタ}常政^{ヒマツ}南部九君^{ヒタツ}
浪^{ハシメ}人^{シテ}、われ人^{シテ}のよき、醫道術^{ヒツヂ}を百解^{ヒツヂ}、武術^{ヒツヂ}を百解^{ヒツヂ}手跡^{シテ}を
西石^{ヒタツシ}を給^{スル}もと、自^シ名^{シテ}、三哲^{サンセイ}と^{シテ}す、南部鹿角^{ヒタツカツカ}毛馬内^{ミナミ}住^ス、
極^{ヒツ}貧^シ、舊宅^{ヒツカツ}の跡^{シテ}、土^{シテ}所^{シテ}石井惣重^{ヒタツシ}即^{シテ}家^{シテ}、常政^{ヒマツ}書^{シテ}、難^シ讀^ス
殘^シ篇^{ヒツカツ}、罪^{シテ}因^{シテ}定^ス、助^{シテ}家^{シテ}、又^{シテ}醫道書^{ヒツヂ}あり、完^{シテ}戸^{シテ}左門家^{シテ}、
三哲^{サンセイ}託^ス一卷^{ヒツカツ}、谷田郡駒^{ヒタツ}市^{シテ}家^{シテ}、并^{シテ}藏^ス人^{シテ}綱忠^{ヒタツ}の文通^{ヒツヂ}
而^{シテ}、綱忠^{ヒタツ}櫻^{ヒツカツ}名^{シテ}石井氏^{ヒタツシ}家^{シテ}藏^ス、平葉^{ヒタツヒタツ}常政^{ヒマツ}之^{シテ}雲^{ヒツカツ}と山^{ヒタツ}である。誓^ス
理^ス、三哲^{サンセイ}社^{シテ}齋^{スル}、願^スのあらう、聖蹟^{ヒツカツ}と禪^{ヒツカツ}とを尊^ス、^{シテ}是^{シテ}活^ス
ば^シ、御^スねば^シ、雪蹟^{ヒツカツ}を拂^ス、禪^{ヒツカツ}を拂^ス、^{シテ}是^{シテ}活^ス、^{シテ}是^{シテ}活^ス。

此三宿出張の内は、ほんと移多れで、まんてらうしてしまひ。

妙法山記

北比内大館銀治町在す。妙法山蓮莊寺の御縁橋、名木あは
乃寺小阿波國妙教寺の僧潛龍院日廣上人撰作て、三餘錄
編輯あり。是月前落花をすと。是れ不盡の良月也。
まことにひそひそと花のあくを。また、落葉あまむる。

山吹

朝安。翌日山振。是日記か。秋田郡神足社と云。地主を
神足と事。うちのうちおむりひとと之徳天皇實錄。神足
衡元年戊辰以降、出城國神足神烈於官社。と云々。是れ
あれ。文字お似すや。神跡の國を。豈かと云ふ神也。是れ
世神足の乱。舊極内高田屋瀬小泉福田青荷。下目浦山下刈唐崎。

長田、片田、上、下、中、下、五村の郷。三月廿四日夕附り、二度、塗装をす。のびとひ
是が桔梗の長串に、手貫とす。金銀堂と折り束と折添で、
母屋と、こわす。木戸屋、廻す。家ノ有。壁、五脚の菖蒲、まゆ
う。如小、かくしとす。ぬいとく。手を新かどか。せくごす。今うとぞを入れ、
まゆある。まゆと。此邊き小北地と。水をひく。そ。不出戸の天神と
菅大臣社あり。その奥の神の祭事あれば、終と。三月廿四日、山振の祀と。物
物をて祭とす。神を祭りとす。と。園主。二月廿五日セタカレ。と
舊國路を。やまびこ祭り。と。山吹の。も。基色を。け。日光。菜種の神費
を。と。あ。す。の。神尼。金瀬。と。こ。す。の。花を。金瀬。と。こ。す。
傳。天正十七年の春三月某日内大臣織田信雄。出羽國山本郡天瀬
河小配流あり。同十一年御謝。少佐より給つて。と。す。此君。すひ事。す
臣。濱田隼人。此を小こまつて。出戸の天神宮と。祭りを。と。す。の。宿題。

後流社司とすと今極内村に在す廿五日、ソヤウツアモ、遊吉其御
東木板天神事例あると云ふれ候、朝下さる山吹を有す
うちより御子小高きて皆がりた樹もやぞ喰べテ及ス、
明ニスル也モ御山吹の色は深青葉のいとも
妙ニ無光射の山吹モ被すされ、ふ吹きらるども、名キナリ

けむあんづら

此見合せの膳海郡衣川の岸在、驗断櫻美、アホ部貞任、
舊毛躡こと、衣闌井木と有す在、アホ下野國河内郡老毛
衣川タス近江國也を云ひ、江源武船ニ卷ハ天文六、丙午九月廿日
志賀郡衣川山宇天神勅詣、アホと云ふ者、アホ者と云ふ者、
アホ參河西賀郡舉母、アホ、西リ上ノ鷲也。ヤドヒト
彦雲タリ母子争ひも、御船乞ムモアレバ

駒形櫻

陸奥國磐井郡小萩莊山裏中郷栗原郡此兩郡世アリ、
又吾勝郡也引て中津と訛リ、エモト山郷の中里也、栗原郡
望七社の其一社セ駒形櫻神社ト謂フ、天守宮と云ひ、
太日靈女神工齋ハ古ニ國扶立尊、又吾勝尊左天常立尊、
置瀬尊也、古ニ爾ハ彦火尊ト云ひ、駒形峯大名神の御事
アホ御事也、此山ハとく高一丈つゝ、群石シモ御事也、雪
ミ湖、異方、陸奥國栗原磐井躡、西高ミ出羽國雄勝郡也、
水無月近ク雪ヨリテ、浦其形馬、ナゾムアヌニテ、ナム
シ也、モカハ此ア、柏と古山也、篠アリモ御事也、
雄勝郡駒形櫻山平の近キアリ、ミハ駒形の幕也、今モアリ

駒形日記から此處に此事ことを記せり。即ち書一波瀬和の若葉堂より
記す。人有し駒形宗法範寺は跡尼まの跡とい。平泉野まの
奥山。今之平泉を秀衡の手よりうけたる所。尼寺の事也。
西行物語（機集抄）小治（治）あえをも。そぞ立井村本寺本尊の奥水
とよがれの舊（古）とてどの多れ。坐と駒形櫻（さくら）とよ。

稻田いなだ

北樋きたひ、秋田郡神足莊高岡村在す。まことに樋ひとも云ふ。うる稻田と却せれど其の名を今も勘へず。稻田と云。櫻田、
大江戸を併せると云ふ。と多うお名也。

小和清水橋こわきずば

神尾神尾かみお大龍だいりゆうと云。今大龍寺と云。延寶二年
の頃より住む。稻荷社也。焉山（はんやま）庚申（庚申）初而云。小和清水と
此事前（まへ）未満水也と記せり。

至陸奥國津輕小溪比良奈伊小錦木鄉（郷）有字村（字）あり。又
あり。又。地處（地處）あり。小和清水あり。又小河。又寒泉（寒泉）と云。獨木
橋（橋）と云。又とづ橋（とづばし）と云。小和清水、小轎清（小轎清）水、彈（弾）清（清）水
と云。此事前（まへ）未満水也と記せり。

錦木の里（のさと）

又名の津輕小溪比良奈伊小錦木鄉（郷）有字村（字）あり。又
あり。又。南部の鹿角（かづの）と云。錦木龍（錦木龍）毛布、細布（細布）の由來（由來）を筆
す。又。又。記のほほ（ほほ）と云。鹿角（鹿角）と云。上津（上津）と云。古
地。皮。根。樹。三倉無（三倉無）と云。草木村ある。今里（今里）。今至
錦木の里（のさと）と云。根。獨木。錦木櫻（錦木櫻）と云。此場（此場）を
機織（機織）音のむ。又。獨木。錦木櫻（錦木櫻）と云。此場（此場）を
皇都（（皇都））と云。又。珍木。古。二百一反。至。津輕を事（事）。里（里）を

塙内ナカニ、西延魂の織ナガシヒメ、毛糸ウツボを引ハサウくもの、その母モチとよりてもひ
ありし、石井甚兵衛某スミヤシロウとひきの後アフタ、花轎村の石井助高イシイシロウ是アリ、
之政七章、甲申カミシマ年テやひの事コトは、葉草ハクサ幸ラッキの是觀上人シカウジン、辯木ビンキ優ヨウ
とシテ、おれう年テ旅リ立タツて、千束チハシ立タツ花ハナの錦木細布キンモクシブの
らひがき世セの春ハ行ハシく。

由伎の宮櫻

由伎上満鄧ウチイシタツヌ毛馬モハマ内ナカニ、鞍スサ名神スサノオノミコト社カミシマあり、その社カミシマ在アリ
古說コトハジメ、奥州オホツコ毛布郡首領マツコ狹名鄉ハナミナカニ御先祖ミタケ大己貴神オオシマツケ持玉タケシマ、
鞍スサ一腰イチヨウ、八目鑓ハチメイカ、龍頭リョウトウ御弓ミヤヒ、御堂ミヤマ奉納アリ。由ウチ鞍スサ名神スサノオノミコト
半奉ハーフ奉ハーフ、三ミ、四シ也イカ。此コトハジメ神社カミシマ、鞍スサ掛スル給スル。鞍馬スサノマ神スサノオノミコト、
雪シロをシロおシロ、大オ海シロをシロ。祖ミタケ大己貴オオシマツケ命ミコト、命ミコト、鞍スサをスサ、
毛馬モハマをモハマ。此コトハジメ鞍スサ四シ腰ヨウも神カミの事コトあり。東ヒタチ、火彦ヒカル名命ミコト、社カミシマ、

西シ稻荷スザノオ神カミ社カミシマ、南ミナミ荒神アマツシマ社カミシマ、北ヒタチ摩マ利支天スルタニの社カミシマ。
今アキたアキほアキの年テ廢アキタクりて、稻荷スザノオ神カミ、神木スザノオ、錦木山スザノオヤマ觀音スサノオノミコト寺スルタニ、
多アキタク五十三代アキタク淳和スルタニ天皇スルタニの御ミタケ。天長元テイジョウイチ神年テ、
毛馬モハマ神木スザノオ、蕭スルタニ校スルタニ。別當ベツドウ不動院スルタニ祐觀スルタニ、祐觀スルタニの
祖ミタケ、大坊スルタニ一位スルタニとスルタニ、太同三スルタニ年テの事コト。大坊スルタニ一位スルタニの古レトロ宅スルタニ、
とスルタニ、大坊スルタニ一位スルタニとスルタニ來スルタニ觀スルタニ。諸佛集會院スルタニ羅尼經スルタニ、一卷スルタニ。
家藏スルタニ此經スルタニも、田村將軍スルタニ真筆スルタニ。ゆきのスルタニ、うれぎ。
筆字スルタニ極スルタニあり。その事コトとスルタニ、由伎施スルタニ宮櫻スルタニとスルタニ名スルタニす。又馬スルタニ、
内スルタニ北スルタニ小古館スルタニあり。武田大權スルタニ之助居城スルタニ。鹿角郡スルタニ二万石スルタニ領スルタニ。
後スルタニ小名スルタニ鞍負スルタニとスルタニ。此館スルタニをスルタニ作スルタニり。其山麓スルタニ西町スルタニとスルタニ古レトロ館スルタニ、
あり。そこスルタニもスルタニ、家スルタニある。ゆきつるかとスルタニ、大坊スルタニ一位スルタニとスルタニの西町スルタニとスルタニ、
住居スルタニ多スルタニ。後スルタニ廃スルタニ。多スルタニとスルタニ、武田家スルタニ士スルタニ、和田兼藏スルタニとスルタニ。

蛭夷人蜂起て云々とて龍神のあれば和田兼藏蛭夷のうゑし
 生きて松前藩の御手を助て津軽を渡り藤崎とてみゆ
 修驗大聖院の皇子とて藤崎坊と號ひがゆび此毛馬内
 来り至武田に金元、大坊一位の後跡とづり舊館の城中二社
 ありを若宮八幡御神と、摩利支天と社領廿斛あり其御
 沖水仕へり、不動院土祖ひ國守利直五戸専ら守り故
 舊館で慶長二年から釋迦堂谷地の東柏崎岡よりせる
 こう不動院の上祖も地毛馬内より來り、摩利支天と城の
 鬼門よりしてまほらを館印とす。若宮八幡と不動院代
 院因年齋の神靈焉、利直の御子三郎麿とよて祭り之
 卷塚櫛

南都棟部郡里小金勢明神と申す事ある。

かひみしけの金生名神と申す事ありて、六七千のうき
 雄元と錢を作りて、鉄索附結して、二三の祠とて爲ひて地
 神とて鹿角の松木材をもくじて、金勢明神とて石を作
 て大の雄元とて作りて、お前をもてて、後をもててそくある。
 痛めぐれまやかとて此社をも備えを紙を包みて、男としてそれゆき
 あれども病の根をもろびて、あらぬきもて、下をかせがせん。在
 道祖神とて立ちてくわいもて、あつねに立て、出世玉雄勝郡高松
 清き外の女陰を石を削り、あくと細め多き雄元とて齋とてそく
 いとく多けれど、雄元と祭るをいはし、信濃國小井田明神
 とておきを作りて、雄元と祭るをいはし、信濃國小井田明神
 繪馬すのいと春画をうきとて、あくと、おと、鳥の神とて
 まろく小廟の社事しづの卷塚櫛のむらくまくを立てて、

吹上の里機

信濃國草井郷善光寺外不吹上と號す。そと八重桜の西に
有事何せさすと云ひて、吹上と子石と多、増基法師の越前記の、
吹上の實不泊出、復かくとことうて、源氏ノ又集、天の原
市に上るを角小立原を夜すまゝお詫走者有て古亭集不
管原故也。秋風の吹上と子立原をも重き花名の御のあより
空古後多、と出羽の源田小吹上源と號り是もじつと源田の
吹上もりとひきゆつて、此事、吹上源以寺内記す。

龍神櫻

龍神名と云ふ近く生る機でもも此龍神宮土塙の事也。又其
子移縁起云、湊福寺鎮守者、移田、湊、船箇澤、蒼龍池、龍
神宮也。亦其左右在帶切山將軍義定箇嶋治坂等舊跡傳謂。

往昔、聖王德太子此地御下向之時、芝野渡越初秋田湊御着
津召給御船、凡人恐、不乘山間埋之、因其所號、船箇澤、則在蒼
龍池之上、其後、夷賊蜂起、時爲謀討、將軍田村廢宮御下向。
此時、強敵退治御誓願頃、祈神社裁、幣帛、其所、則號幣切山。
軍議詳定、則名、議定箇嶋、西南有流水、將軍謀夷賊洗斬
血、則名大刀洗河、強敵退治、則名、渡坂、般津時、灌帷幕、則
名幕灌川也。又、之處有之、而名、湊福寺の鎮守御神、龍神
也、而、蒼龍權現也。此御神、舊御神也。所以、不祭也。
此寺、湊福寺、長岳宗安大禪定門主木主也。此重慶、安倍
貞佐、後繼室記す。湊福殿、阿倍守季、守季子、乃太郎、康季
少次郎、康季子也。康季子、乃高季也。高季子、末季の三、

兄の康季（よしとし）が、唐樂を歌ひ、のどへ鳴く事は、所れまつ城や築城
阿部廣季（ひろすえ）、應永廿年癸巳秋八月廿日逝去。高季季（たかすえ）の妻原
建経（たけのり）が、文祿三年甲午の秋あるて、藩福寺（はんぷくじ）に、舊居寺
うして禪林（ぜんりん）なりし、替田太郎實重（じつしげ）が、世かてせゆる。又龍神別縁起云
そも。此龍神者、秋田城主世一等敬故神威日昌西並鑑益新也。
龍神社地方百有餘間、藩福寺及華嚴堂甚藻堂皆在其中
三月中西日移、神輦於帶切山備禽獸臭肉。云々。今云云の
祭也。慶長は、より通て、茶倉龍神モ荒廢（あらなつ）。

笛吹櫻

名利人知れず、びきをひくひくとも、小雨ともかねて、十日連夜も、
彦山のあすみ中納言家持の手も妙手。此手も在りて、保之院と稱す
者也。此手が妙多羅天王、鬼女を祭る社あり。北齊前半事也。首

ちくと笛吹人あり。あはれもあはれむ其の顔は、すこしうる
地あり。笛吹多け。笛吹さうともいひて、笛吹しもふ。

笛吹院

出羽國米郡天瀬川の支郷小市野の村有聖觀音堂有、
此觀音堂で笛吹の聲音とよきとぞの因縁（いんえん）。願ひあらん。笛笛
を作りて納めあらが音曲を好み、繪（ゑ）や書（か）など、世堂のアレ、
アリ。小さづれ篭あれべ、こと笛作さづれとぞ。

笛漏（笛漏）

同郡岩猪の浦小蘿深と子弊破茅瀧谷。此園のむか小窓を
ひき籠りて笛吹ひやうを妙手と吹出しと上手化名をうるとソラ
波山も、うるさくうちあれば、と笛漏さうとも名づく事あり。

日上中の梅

さうめい

十五

あつて、中郡河北舊目名形郷（カミナリマチ）に於く稻前原（シロハラ）に日揚神（ヒタチノミコト）を鎮（アサヒ）む。此神、駒（スズキ）聖觀世音菩薩（スルガボダマ）を真（マニツ）々天御中主尊（ミタマノミコト）を祀（アマツテマツル）。もしく世の神（カモシカノミコト）と云ふ廟（ミソザイ）を有す。四十代天武天皇（アマツミコト）御宇（ミタマニシテ）、白風（シロカキ）之御岩（ミヤマカキ）兒山（コイマツ）の麓（スルメ）、天台真言（テッダムジム）の寺（ミハラ）費（ヒラシ）を立て、櫛（スルメ）を以て開闢（カクセキ）の祖（シロヒメノミコト）。但優婆塞（ウバセ）至持（シテホシ）大德仁興（タケルニンコウ）の祖（シロヒメノミコト）と云り。其天台真言（テッダムジム）寺の跡（ミハラ）と云ふ。田園（ヒラカタ）と寺宇、種字梵形（ボンジメイ）却（シテ）三石、あれど墓誌の五石（ゴソウ）など多く存す。上櫛壇（スルメノタケ）下櫛場（スルメノマツリ）と其別（レル）地（チカニ）と云ひ、秋田の税（シモト）也の者もんうるわひ、天街（アマツナカニ）で雨（ウ）もぬり少（シカ）ありて、晴（ヒ）ともかくし、凶歲（ヨウザイ）せとぞりて、かくかくこころをかかへと、萬民（マニミン）あまくせゑあはれかくあきみくもひりけき。久くも圓仁大師（カクニンノミコト）と云ふ。其母（カモ）、柳山隱（スリヤマヒカル）の香（カモミ）を燃（スル）かし、出處（シテハタツル）あるをほのひきだめて、あまくせゑあはれ。

蒼生（アカシヤ）の悲（カミナリ）であるかひく西（シタマツリ）を仰（アゲル）て嘆歎聲（タタキナリ）の喬山風（タカシマノキリ）吹きまわる雲（クモ）と空（アカシヤ）ばかり、天（アマツ）は通（アマツテマツル）をえさす音（オノナリ）響（アカシヤ）る谷（カニマツリ）不^可御（アマツテマツル）身（シテマツル）りづくと行（アマツテマツル）。餘（アマツテマツル）三日とよあはと風（アマツ）と吹（アマツテマツル）おひき雲（クモ）と空（アカシヤ）をひらがう。晴れて櫛（スルメ）の下（シタマツリ）歩きて、居人（アマツタマツリ）のまゆづきみをもあまからずとちくびらびらやひぬうまで、をもくじやも、人をもんじふるをもと有す。その年比田の実八束物不^可無（アマツテマツル）い戸口の鑿（アマツテマツル）小田の荷穂（アマツテマツル）の五箇（アマツテマツル）をもあらざる。縣（アマツテマツル）かまひ榮（アマツテマツル）をて家（アマツテマツル）ひひそ者（アマツテマツル）器譜（アマツテマツル）の今振り（アマツテマツル）をこと、日長田（アマツタマツリ）村とひそひじう稻神（アマツミコト）とぞく。會津（アマツシム）とひそひ天（アマツ）長田（アマツタマツリ）とひそひな重（アマツテマツル）ひひそひ事（アマツテマツル）とひそひ事（アマツテマツル）とひそひ事（アマツテマツル）とひそひ事（アマツテマツル）とひそひ事（アマツテマツル）田佃の賤（アマツテマツル）の男（アマツタマツリ）がばねれ山賊泊（アマツテマツル）をひる船（アマツテマツル）も。此日晴（アマツテマツル）神（アマツミコト）の三齋院（アマツシヤン）をもとせよ。其日明（アマツテマツル）神（アマツミコト）三覺院（アマツシヤン）の後亂（アマツテマツル）

高雲山、源養院、尊道法印そはへり。日揚神社の枝神
大山祇神、藥師如來、馬頭觀世音、をどもそひ。その古
跡山石子山^{アシタカ}、稻前原^{イハシハラ}、山櫻あれ。日上^{ヒノミツ}、ゆめくら^{ユメクラ}、
その枝子^{ハサカ}の下^シへ坐る。四方石種と子のびて、おれむつ^{ムツ}、
石小鬼^{イシコトコロ}、御^{スル}、幣^{スリ}されば、百鬼衆も、其の元祖^{スル}と日上^{ヒノミツ}
の神^{ミツ}をすまき。

連理のさづ

同郡能代^{ハナダ}の湊^{ハマ}町^チ山^{ヤマ}宮^{ミヤ}額^{カヒ}近衛某卿^{ミツル}真華^{マカ}此社の門^{モジ}付^{スル}
むじ櫻多ければこそ、榜^{ハシ}小路と云ひ。今、櫻林^{ハシノミズ}、櫻^{ハシ}と名^{スル}、
櫻木連理あれ。連理小路と云ふ。そぞと名^{スル}。名^{スル}と名^{スル}の名^{スル}とあん^{アソ}とさうとさうと連代^{ハシ}連代^{ハシ}と云ひ
せう様も多^シ。今も名^{スル}者有^ス。富田^{ヒタ}の柏龍寺^{カツリョウジ}の木を古繁

見物前さづ

南郡盛岡見前村のこち。津志田^{ツシタ}と^ハ北津志田^{キツシタ}のじり。
大浦古京太夫為信^{ハシヨシ}云津輕^{ツケ}組^{ツク}の舊宅^{カミ}跡あり。そこ古^{ハシ}
津輕村と云ひ。まこまの付近^{ハシ}、瓦^{ハシ}と土^{ハシ}極^{ハシ}重^{ハシ}り。

うわき代^{ハシ}のさづ

同南郡^{ハシ}石文^{シキ}村と^ハ眞付^{マツハシ}の間^{ハシ}原^{ハシ}中^{ハシ}千曳明神^{チハシミツシム}社あり。
古^{ハシ}小^{ハシ}みちのち石^{ハシ}と引^{ハシ}る。あるいは、中^{ハシ}に中^{ハシ}の石^{ハシ}。
また、中^{ハシ}平引^{ハシ}石^{ハシ}と^ハそそり立^{ハシ}る。かくも御^{ハシ}きうちも。
傳訓^{ハシ}、和名^{ハシ}小^{ハシ}、千人所引^{ハシ}石^{ハシ}と名^{スル}。神代紀^{ハシ}、^{ハシ}と
云^{ハシ}う。抄^{ハシ}不^{ハシ}信濃國^{ハシ}諭^{ハシ}語^{ハシ}郡^{ハシ}多^{ハシ}。古事記^{ハシ}小建御名方^{ハシ}、
神^{ハシ}手^{ハシ}小^{ハシ}引^{ハシ}石^{ハシ}捧^{ハシ}奉^{ハシ}。又伊勢渡會^{ハシ}郡^{ハシ}也^{ハシ}。
逸不^{ハシ}引^{ハシ}。君^{ハシ}うぬぬと^{ハシ}壁^{ハシ}をわざて^{ハシ}の當^{ハシ}千引^{ハシ}の石^{ハシ}。

誰、あへき、喜撰式、大石ちひきと名えり、万葉集五言平
引の石、セセウノ頭手づじもとあり、古事記年、平引石と見え、五言
もきの石と見えり、山城守治日碑の外山守と即方大石かく、
鴨長明、住居せ所し、逍遙院、雅き方、車をよび至れと
平引の石、名をひきすまふとも、其居方一丈の室、高七八尺
過も、柱楹皆鎖首用の傳を移を時、一車小載、便うそしらて有り、
主と見えず、地あ部の平引社ある杜、栗木と多く、一丈の秋紫森
の栗、三千石目拾ひ歩き、松前不庭り事、又櫻もと多き杜、

小田原櫻

相模國小田原北條氏康の城、元龜の櫻もいぢくめである。
（重徳あるとゆきほるも）本朝三國志云、小田原北條氏康逝去、
元龜元年十月三日春秋五十六歳大聖院殿東陽岱公居士塚

墓、小田原より在し、早雲寺宇の上、數多御墓小及ぎと下總
國、古河ノ城下小寺建立て、大聖院と号す。和歌、西三條逍遙院
殿の門弟也、其頃、關東無父の連者、去、一と夏の日も、西山に没
後、氏康納涼のあ、高樓小笠りて、遊慰、けふを、狐の頻々鳴き
き、梅、窓、軒、坐と、右大將家、建久四年夏、信州浅間、三原、
狩し給ひ、と、狼の鳴きを、惟、三と、い、愛甲季季隆、被傳すと、羨
き、あると、と、詠もみと、やけじが、氏康支那の、もと、夏、物
事事、うち、わらと、夏、そぞろ寝す、嘗て、蠍の、夜已く、
月は、上、小寺よ、少、孤一宿、近習の、のと、夜、而て、夕れば、彼、狐の鳴
つるに、倒れ死んで、し、諸人皆、當意即妙の不思議感ト
けれどもと、見えり。

さくべのさくべ

同書云、三井寺郡城主、鈴木日向守、逆心の匂えありけり。徳川家
今川義元が軍議ありて、永禄元年二月五日、寺郡の城にて一
寄せ給ひ。同年十九歳是日も初陣とうけられ、ひそとえす。
此事部のハ惜言えらるゝよ山猿さんぎんとも多し。

あくまでもさう

ああじとまよ遠江二俣城將依田右衛門佐々光明城主、武田
勝頼、朝比奈又太郎あさなと見えず、二俣も光明山も至る新茶山
街道に二俣より移り、且つ光明山のセ品セヒン樹じゆのあらを、坐谷堂をそぞろ
みさす、むしと喫ひよ。

あくまでもさう

出羽國雄勝郡おほなかと赤穂あかほと二村あり、又二石子大袴おおはきあり、小袴こはきと又
處ところ多し、小袴こはきと毛足けいとソシそし、世何ようじ、特とく裏うち袴はきと小袴こはきと

あくまでもさう

母おや之の越中守ごく郡ぐん守もりとすのと無相むそう小袴こはきと毛足けいと出羽郡しゆぐん出川でかわ
村むらのあれ、この戦たたかい諭ゆ小袴こはきも毛足けいも墨くろ川かわとて、出羽しゆ川かわ、
瀬せ瀬せ、桔梗ききょう山さんと山さん橋はしあり、林はやしもあらず、山さん流りゅうと毛足けい大川おおかわと
安永四年七月の夏、四月某日、洪水こうすい岸崩きし崩れて、土の申どす、家三西戸さん出です、
其家内小長、二間半ふたまんの杉すぎの船棹ふなざもも、地じ川かわ廣く舟ふねとす
ほじ外ほかれ、また、麻田小舟あさだこぶね、佐井川さいがわ川かわも流れぬも、天長五年
小おじな御ごの御ご事こと後ご紀きと見えず、其らそらに草くさぬもあらず埋うれちある、
安永四年七月か、家の内小板こいた墨画くろがの佛ぶつ、作つくの机机、古古鍛たん折おり
轍わ、此こ下さと之のあと周まわすと、祝のぶ膳ぜん一いつ出です、こも、つひ、
らうひ龜かめとよも、木履きはきを出だ木き變かわ京き踏ふし、左ひだりのまま白しら黒くろ緋ひの穴あな
寄よりて有あり、左ひだりの右うのまま白しら緋ひを代か完まつもす、栗くり御ご、と小こ藤とうの事こと

あくまでもさう

寛政五年の三月十四日、間もなく曳欠川の岸崩れ板塗村
市重即ち家臣畠畠と家上に石ころ出で事あり。すこひ文化
五年の夏、脇神村の枝郷アリヤシ小勝田村の高岸、米代川の脇さら山崩れ。
大さる家出多き機の具絆架、笠置機、茅草机、被分じてある中、八角形
木の長一尺一寸六分四寸に及千六百字あり、二丈の間より定む。幣文
事のとくとく出で、此事考て一巻とぞ。

三月五日磐井郡栗山莊脇衣村、清悦坊が坂あり、清悦坊
小西即清悦と判官義經、本主の歳のうち仕まつて後は化術
済みとす、清悦物語とすりあつて中は國守政宗云清悦
つづき事あり、とく長壽の人に此清悦が僧の近事めである
をあくまづれば、世をうの名とすらしくあ稱せよ。

二十九日 檜

出羽國秋田郡南比内莊獨鉛古石の枝郷アリヤシ日説ヒツヅケ古名手とす
而あらうをこし花坂ともいふ。蠟表も家極しき地ある。小
草亭スモウテイと塙カミの事あり。そのうち、表の、斯良奴スラヌ迦カより塙カ
泥モと以て甕カスク少供カスす。あらもくす。檜あらすありしの意今も
あら花坂の名小向コノハシある。

德一とす

津軽の子縣ヒサキ山、機あらすのこすり、小春かひゑす。徳一大
師の事かとぞ。それあらすてあらす。筆のものかとぞ。御用
ふだやか、子掛コハシと之名、出羽の山中郡下に小掛コハシとぞ。徳一大師書
同名あり。古掛コハシ、小懸コスケ、兒掛コハシ、子懸コスケなどもあらす。徳一大師書
扶桑隱逸傳云。徳一者、唯識之翹林足也。開闢常之葉波

寺而居、門葉む茂、而疾。沙門莊修、敝井衣鹿食、恬如自怡。雖行長途、不用乘輿。駕疲牛騎瘦馬、嘗作新蹟。破山家大師、相傳称之。云其老女少婦、各立樹、力無所。予懸之、其亦德一大師也。子御、子津輕、秋田、久慈、真夏、舊跡、有之。仰慕者多也。

三笠の山さへ

あくまき、聖武帝、太笠山の八重櫻を折りて光明皇后へ贈り給ひ。記、唱、春奉子、出、サニ 美花、ヒトツノ 环観、玉女、

移、シテ 寝歌、日小亭をもとを西御山櫻、姥は尼也。夜、ハタハタ 跳び、ハタハタ 乃え、ハタハタ 事ナク、もよひで羅敷はじとうのを

あくまき

奥宮を、雅勝郡下在り。出羽、魚沼、山形、岩手、巖山、等地峯

鷹、ふね、さくらんぼ、多く多ければ琳名と、かくもまくと、かくも

かくもあめ事と、社日日記とばく、かくもまくと、かくも

燈其室櫻

秋田の先走り、寶貝塔寺の燈其室櫻は事と云ふ。記、音、ヒトツノ 申す
御されど、まことに小もの也、むつし、權三とがる此を、書より以しと
かくやも心ありやと第々云々。薦着ても、おも一匁の楓、カシ
毎年、かまく、いふまちあまれし、かどれどもがん、德政夜詰云々。
寶塔寺、燈其室櫻とぞ書はれ、明和の頃、玄、庵、倍良、中、俳諧師
あり、美濃守、宗匠、ぬうれと、匱り尋ら、第、あまく、之基、
ありの、此櫻の盛、い、貴賤老若遊、後賞美也、事ありし事、
其本、芭蕉代碑と建、門人、右談して建サ、其首、四五葉の榆
通花見、うるうと多き、其後、其櫻一枝折れ、墮じ、

事の物前表はさうすなまく、伍良能道が極めて多くある。
 世櫻の木の巡り五尺をゆき、高さ丈斗ほど、五尺上を四ツの枝
 うりて、端末は如し、依て名とせり。描く廣ひに處七八間有り、
 高低ともく、出焉る奇特の木なり。かく四ツと況く賞美る樹也。
 小翁の句いかど、走る一走るべき小四ツ描くもとす。と走
 るに相應せぬとすべし。それより次第に拾れ物でけし。世人
 倍長とぞする事、かくして、他人句をすと、其協を乞合ひよ
 く。し室匠ありと見て、行を定めて自ら、庸人よ云とし。幸崎の
 桧の枯れんとせよ。道邊院の由来あり。かくび葉えーとう。
 告良、あす様と植し。毎年、云々無事。時ある事や徳政。
 翁の名としも、うろを世にありて、すりむん。

こうづの河原

灌漑の率堵筒瀉近水轉り。川と以細流あり。之の山峰すきやう
 ちの橋の二三種生ひそり。多く是れ此の名とせり。此川は
 穗毛石城多り。又河床に石くとくと。山向は岩瀬
 うねりと石斑魚鳴じる。此名合。ト又古称あり。北こうづ
 小川ノ側より。彼なり。

和田寺櫻

秋田郡南比内在。子村寺也。天台宗。十瓶山和田寺也。
 之寺あり。大永三年、癸未春、獨鈷古名。子後相続御。城を
 築。其城主、浅利譽市義遠苗裔也。文書の始も。永正十
 四年丁卯の内。陸奥國鹿角郡松館と号す。在り南北皆て
 領せし。其城造宮のころ、和田寺。雪月津。内助。布刀。鳳凰山の奥
 魔浦。甚きのこか。鳳凰山。麓。走。鳳凰山玉林寺。山すすめ也。

改りて天文九年癸巳の夏、曹林より里社宗補陀寺、九華草菴守
 瑞禪師で鼻祖として曹洞の家式を傳へ、回禄て寺の寶物古記
 等、伊勢も、また北幸今大館小遷せり。圓利宗の菩提寺となり。
 玉林寺殿明庵、瑞光大居士、圓利則頼天文十九年、圓利、頼平、(則頼
 津輕城主)為信と立て、秋田、あんとまくらこちて、慶安元年
 山田村少領ひ同三年、小為く家臣、佐藤太學心つりて、沼館の道者
 頼平と依す。頼平法号、昇平院殿、年舊宗清太居士、(慶長三年戊
 申、澄考、浅利家、根津神平)流て、鹿島養小名譽人多く
 頼平も、舊をいきく好むけず。又、年鷹の文字と法名とあり。
 年鷹、其舊の事とあし、雪舟の奥の天敵、小輪谷、(年鷹)也。
 形うれ、(年鷹)合ひて、かど山川の濶あり。その向てと鳳凰と北山の舊
 秋田寺の舊跡あり。玉毛を稱められ、和田寺碑と名書。

あじらばせりや

此の園を、古くは在り、其舊地を、移営しが、どうにもうさうと、
 名附す。傳説某に此の園は、奥州栗原郡をも、坂上田村麻呂、妻
 と征せし時からとづいて、その後、源頼義の、清原武則と、金せし所と
 云ふと見えり。又、其跡すらも、

河邊

出羽の河邊郡小羊人入る櫻ありしより、御ノ櫻とあひて、
 河邊也。今姓も古あり、但根草四巻、小櫻が、(御ノ櫻)と大和國、高市郡
 小野兵衛とあり。又、靈夢寺ひとつて、小篠と名付て、ある。此裏
 との故に、土木の中にも一族のうち河邊三郎、芳賀重郎など、此の
 セらより、今もむづむづしてゐる。とおもひて、とおもひて、此郡を曰く、
 古の地じ續記卅二卷、寶龜土年八月ひ卯出生、國鎮秋將軍安信

朝臣家麻呂等言秋志良角、淳因、宇奈古智、平由理柵者、
賊之要害、兼秋田之道。又寶龜之初、國司言秋田難保、河邊
易勝者、當時之議、依治河邊、方々とぞえり。

長岡の一重櫻

出羽の南比内、扇田、郷長岡城主、浅利勝頼室、ときかひ大館より、
江を出でて片山駿河、麻田の正門見守門前、小舟とひき、勝頼が
来やがて、おがくの鎧で以て空手で勝頼一鎧を穴られ馬うしろで
走り、多喜あつて立あき、古井の田を駆入で身りぬ、そひゆきせんじた。
玉林寺小蘗同、現成院殿機安、全大居屋、天正九年辛巳清心院
日輪妙光大師同、片山駿河、未今片山村よりして後町と
いふも、片山半太郎同あり、古城跡、長足遠野より一里至る所、
今ノハサウエの名也。玉林寺を歸田同、留奇と云、天台の二石を、

十二所の長興寺を共下野國宇津宮の常光寺の枝寺あり
トヨタマ玉林寺浅利家の遺物と、黄金制の横刀と、五寸の鎧と、
寄せらる高襷同、小さる灰と、なりの其灰の中より半月の眉尖刀同、櫻木出で
り、また浅利家の古記録等もありしうるとして傳へもとまし傳。

太宗良八重櫻

平城天皇の時代大銅弘仁のころ、八重櫻の多くをうめぬと
花小連同其世春をもびれず、今をいわくの櫻木一本を纏ひ花
の種同、人傳同、ある人も、沙石集六巻、芳心有人事同、傳同、
奈良の都へ八重櫻とまゆる、當時も東圓堂の前小在す、當初時
后上東門院興福寺の別當小仰て彼櫻を呑一けれ、掘て車入て、ま
ゆせげ、大衆の中小見合て、事の子細と問へ、思ひくも答へければ、名
得え櫻を無左右もあらせ、別當通、不當也、僻事同、且わ色も

なり。仰仰あれ。是程の名木。争う進をさがめよと。やぐ
且吹大衆催す。打とひ別當と拂ふべし。計付。此事よりも
如何か重科行はれ。我身張本不可出。とぞひ。此事。女院支召。
奈良法師心多犯者。多思され。わざまろき。大衆。寔。色深り。
ま。此櫻。我搾と名づじ。伊賀國小金跡と。庄を寄せ。し
花の庄と名づけ。壇をせよ。花盛七日。宿直。是。守ら
せよ。今。此櫻。寺領多。昔。とかく。事有り。と。考
え。此事。和漢三才圖會。七十卷。伊賀。花壇庄。本名。餘野庄。
一休帝之后。名。韻子號。上東門院。美保元年九月薨。壽七十
性急順。有。女之風。嘗聞。南都東圓堂前之八重櫻之美。
命興福寺別當田。欲移栽根。別當應命。於是。僧徒等
太怒。曰。此櫻者。吾。寺之靈木也。何。出于他。爭論。不果。后聞之。

謝曰。惟。毒。之。過。也。蓋。奈。良。法。師。從。來。我。疑。為。殺。風。景。入。也。
今。知。好。風。流。之。桑。門。也。其。愛。花。也。渥。自。今。以。後。呼。斯。櫻。而。可。
稱。我。櫻。後。世。全。勿。移。栽。于。他。勿。以。且。寄。附。伊。賀。國。餘。野。莊。
每。年。花。時。回。檣。圍。花。守。之。因。以。餘。野。莊。號。花。檣。莊。衆。徒。等。
及。都。下。憲。感。之。其。後。以。彼。櫻。被。移。栽。于。平。安。城。下。之。於。此。
都。八。重。櫻。多。九。重。小。赤。し。ゆ。く。伊。勢。大。輔。云。見。之。傳。訓。葉。
前。編。二。千。六。水。は。る。か。上。東。門。院。南。良。の。都。の。八。重。櫻。と。我。櫻。と。名。
を。し。そ。伊。賀。國。余。野。と。名。を。寄。て。花。垣。の。庄。と。名。け。地。木。木。壇。
を。せ。そ。せ。ら。れ。花。の。盛。こ。と。小。七。日。つ。宿。直。し。そ。是。を。守。し。せ。り。け。今。
彼。庄。寺。鎮。さ。と。砂。石。集。は。る。そ。と。新。續。古。今。集。と。永。仁。大。嘗。會。際。
紀。方。屏。風。花。垣。里。白。妙。の。木。綿。と。う。と。神。ま。る。御。忌。子。は。あ
と。垣。の。ま。る。の。兼。好。集。と。善。提。樹。院。藤。も。此。余。野。村。と。あ。伊。賀。郡。西。里。

まことに今せうけうちの都へ重櫻の物語ふにあつたあ。

いよきく

伊勢國白子里の觀音寺の四季櫻の事と、せきりの人の
事と、然かにあやしめほじ花しまで伊豫國の温泉
の事、うつせみの事と、いよの山の事と、あくまでそとをえど、
六花集の移し、よの山の湯御敷を左へ右を九ツ中半、すこしき
いよの湯地図はいくつあるか、かくの名高き事と、世のことを記
す。北國小十六日櫻と、初春の十六日を、ひまほりいとめづけ
事と、もあられ、和漢三才圖會云、伊豫國久米郡の下に石寺
同郡石出村小在、後山東向、本尊、藥師坐像三尺云、有河野
四郎城跡、道後湯左行出松山城、山越村有櫻名正月十六日櫻
年以此日為盛、うとうとすものあひ御制云、初春のうれしき
わほゝる都のあざさうをもふ

破損あり

